

## カブトムシのいる風景とは 田んぼや畑があり大きな母屋の農家があり…

毎年、会津高原のペンションから、新しい年のカレンダーが届く。自然写真家・布施正直さんの作品を、タテ21cm×ヨコ15cmのサイズに仕上げた美しい印刷物だ。オーナーの挨拶文が同封されていて、今回は「カブトムシのいる風景」という、読み手をほのほんとさせる一文がしたためてあった。

「私は小学生の頃、夏になれば頭の中はカブトムシのことだけでした。今でもいい歳をしてカブトムシの季節には心躍るものがあります」「私のカブトムシのいる風景とは、田んぼがあり、畑があり、大きな母屋の農家があり、裏の納屋の脇に小さい積んだ肥塚があり、ヨセは草が刈られて清々している」と。

彼は茅葺職人でもあり、このペンションは旧館岩村水引で行われる茅刈りツアー参加者の宿泊施設で、私がお世話になった十年ほど前は、ペンションを手伝いながら茅葺きの仕事をしていた。村内にある重要伝統的建造物群保存地区に選定された前沢集落の屋根も、手掛けていたのだ。昨年は

「新しく亭主になりました」と書かれていて、以前は帝国ホテルで調理をしていた父親の後継者になる決意をしたのだ。茅葺きは続けていくのだろうか。茅葺職人の感性は、時代に應ずる気配が無く優しく独創的で、自然への観察感は鋭い。「カブトムシというのは、天然林にも少しはいるだろうが、そのほとんどは里

に住んで、人の暮らしと結びついて生きていく」と、結ばれている。里山に愛着を持ち、昆虫の生育環境から風景を語る職人の感性は、茅という自然素材を使い、道具は手作りで、空に手が届きそうな所に身を置いて屋根を葺く伝統的な生業と、深く関わっている。

地球温暖化の対策として、エネルギーの転換など新しい環境づくりに取り組んでいるが、「カブトムシのいる風景」的な視点は、タイムリーで優しいまなざしなのだ。カブトムシの生育する環境は、地球上に生きる私たちと似ている。カブトムシの幼虫は肥塚の中で、冬を過ごしながら春を待っている。